

謝りと感謝（遺稿）

蔡茂豐

年は 2021 年に入り、私も 90 才の年寄りになりました。人生 50 年と叫んだのは昨日のことに思われました。

世界がコロナウイルスで覆さんばかりのときに、私もこの世を去ろうかとの一刻を待っております。私は昭和 8 年、1933 年に台湾屏東生まれの蔡と申します。日本筑波大学文学博士（日本語教育専攻）と名乗り、学位に便乗し、1965 年から時代の需要と時勢に応じ、日本語を教えることになりました。

1945 年に二次大戦が終わり、台湾は皮肉にも中国に返還され、内乱を 1949 年まで続き、一方、中国語教育施行の国となり、否が応でも中国語、日本語両用の国となったのであります。

1945 年まで、日本語教育を受けた私は日本語 5 年間勉強して、中国語教育に切りかえられ、教師と便宜によって、日本語、中国語混用の教育を卒業したわけですが、卒業証書の内容は中国語であっても、教壇に立つ教師の出身は植民地時代の日本語教育を受け、終戦のどさくさまぎれの語学だったのであります。

1945 年まで一応日本語の教育を受け、1945 年からは一変して中国語教育の形で校門を校門を出たわけです。教育現場を実筆で説明しようとしても、どこから筆をつければよいかさえ、むずかしいのであります。短絡的に言えば、日本語、台湾語、英語まで入り混じった言語環境だといえましょう。道理で同世代の私たちには、「何々が得意だ」と胸を張っていえる者は指を折って数えられそうもないといえるだろうと思います。

中学卒業後、屏東師範を受け、教師になる考えをもちました。奇妙にも師範時代、日本語を捨てることなく、勉学に励ました。1957

年、自分の将来を考え、大学進学試験を受け、成功大学漢文系にふり分けられました。自分の実力はこれしかないと諦め、一般学生より四、五年遅れたわけですが、自分の力の不甲斐なさを嘆くしかなかったのであります。

味気ない授業の内容を慰めてくれたのは、本屋からの依頼の原稿でした。五年間の日本語教育、戦後からの中国語教育……。なにからなにまで中途はんぱの「実力」が社会の必要に応じたのか、「日本語の翻訳家」としての収入までが大学を卒業する生活の支えとなったのでございます。

1960 年に、たまたま新聞広告で日本交流協会¹の奨学金生の「募集」を知り、天の佑だと飛び上がらんばかりに応募内容を詳しく読み、試験に参加しました。400 余名参加の第一次試験に 20 名、次に 10 名、最終決定六名の 3 番目に倖いにも入選したのであります。

東京教育大学で勉強したある日、学校の帰りに呂秋文という留学生に会いました。その話によると、台湾の大学に日本語学科が設けられ、専任講師が欲しいが、私に連絡せよ、という理事長の命があった、とのことでした。

正に青天霹靂。妻とあれこれ身辺のこと、学校のことなど検討した挙句、指導教官馬淵和夫先生の指示を仰ぐことにしました。そして、先生がいうには、帰国して就職せよ、とのこと。指導教官のお話では、学位と職場がとりにくいこと、初心者の日本語教育なら、君の力で十分だなどを論してくれました。

そして、博士コースを休学し、新設の中国文化学院日本語学科²の専任講師になったのであります。1965 年 3 月のことになります。

時代の寵児といおうが、急に役者になったように、毎日がたのしなかったのです。道のど真中に狼が待ち受けていたのに気が付かなかったばかりでなく、担当科目が一旦簡単に見えても、手に負えないこ

¹ 当時は日本大使館であった。

² 当時は東方語文学科日本語組であった。

とばかり。新しい科目をこなすまでの力をもっているとはいえません。「一生恥をかく」とは知る由もなかったのです。

授業では五十音図をはじめ、何から何まで「新」の一語で通しました。学生諸君は戦後、台湾ではじめて募集した一期生だし、学科の教師は「新人」許りで、五十音図から習い始め、教え始めた者ばかりでした。今ふりかえてみると、慚愧の至りでありました。学歴は修士号を得たばかりで、教える内容はともかく、資格はちゃんと間に合っていました。

そこで、「P・T・K」行の発音が問題として出てきたのであります。概括していうと、(1)「P・T・K」行の発音の誤謬のこと。(2)有気音と無気音のこと。

パ行、タ行、カ行の単音になぜ、二種類の発音があるか、その発音は中国語に似ているが、どう区別すべきか、ということです。

まず、二つの発音があることですが、「P・T・K」行を平仮名で発音すると、次の通り、

パ行 ぱ、び、ぷ、ぺ、ぽ

タ行 た、ち、つ、て、と

カ行 か、き、く、け、こ

となり、

パ行には「pa」と「ba」（中国語の「ㄆ」と「ㄅ」に近い）

タ行には「ta」と「da」（中国語の「ㄊ」と「ㄊ」に近い）

カ行には「ka」と「ga」（中国語の「ㄎ」と「ㄎ」に近い）

（蔡茂豊先生 2021 年遺稿。頼錦雀 2022 年 1 月整理）